展望

言葉との出会い

柴田佳美

歌の中で使う言葉が、作者の世界を示す。「歌壇」（二〇二六年一月号）の、高野公彦の「時計屋の時計」十首を読み、言葉の美しさと楽しさを改めて思った。

話す声やさしき女人と語らへば彩雨に
逢ひしやうな喜び

辞書引きて「伯仲叔季」の意味を知
る長きかな我の〈辞書引き人生〉

一首目、グーグル検索で、日本画の川合玉堂の代表作に「彩雨」という作品があることを知った。紅葉と水車に降る雨を描く。歌の中の「彩雨」もまた、その絵のような自然と生活をやさしく彩る雨だろう。

「伯仲叔季」は、伯は長男、仲は次男、叔は三男、季は末弟で、兄弟が生まれた順序を表す言葉。そして『論語』が出典である。

このように、日頃は使わないけれど、言葉の森の奥でひっそりと生きている、そんな新鮮な言葉との出会いがあった。

また、そのような言葉を使った一首は、普段よりも読むのに時間がかかるから、ゆっくり味わうことになる。例えば「彩雨に逢ひし」はゆっくり「saiumiaishi」と読むから、「ai」の音の繰り返しがあたたかく心地良いことにまで意識が届く。韻文を読む楽しみを感じる。

短歌は基本三十一音だから多くを語らないけど、言葉の背後の気配を読者は感じる。言葉の開拓をおこない表現に磨きをかけている作者の世界が感じられ、読者の胸を揺さぶる。

次に、山中律雄の歌集『光圏』を見たい。作者は曹洞宗の僧侶で秋田県の人。大病をされたあとの歌集だ。

おのづから身口意弛び暖房のこよなき
部屋に猫らとあそぶ

「身口意」は、身体的活動（身）と言語活動（口）と精神活動（意）。人間の一切の活動。三業のことらしい。仏教用語が温かみのある歌の中で、親しみやすく詠まれている。

繰り返し石打つ音のかろやかに添水は
日がな時間とあそぶ

「添水」はししおどしのこと。添水の様子を丁寧に詠みながら、歌の奥には、絶え間なく過ぎ行く時間を生きる現代人に、時の優しい横顔を見せてくれるような慰藉がある。

うちつけに闇のなかよりあらはれて蛾
が街灯の光圏を飛ぶ

歌集のタイトルでもある「光圏」という言葉は、造語であろうか。漢字の意味から光の届く範囲をイメージした。

次の歌も、現実的な手触りのある歌で、心に残る。

涅槃ゑの精進ものを昼に夜に食ひて心
身あはきこの朝

横向きにストレッチャーに乗せらるる
わが身おもへば寝釈迦に似んか

『光圏』は、自身を含めた対象を曇りのない目で捉える。構成面では、僧侶としての歌や病の歌と、次のようないわゆる「よい地の歌」が絶妙に配置される。

雲梯をわたるあるいは砂を掘る子らは
遊びをおろそかにせず

たまたまに通り過ぎこし山原の百合の
蕾のその後を知らず

では実作で、自分の選んだ言葉をどのように相手にきちんと届けるかである。一首全体が意味不明にならないように、簡明な歌を心掛けたい。そして、心と言葉が張り付くような瞬間が訪れたら、頭のストックから言葉を取り出す。優れた作品を読み、それが大切ではないかと思った。